

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

5 伊藤 光一氏

いとう こういち 元衆議院憲政記念館主幹

日時：1998年3月19日

出席者：伊藤隆 有馬学 季武嘉也 梶田明宏 西川誠 武田知己

伊藤(隆) 皆さま、あまりご存じない方もおいでかと思いますが、憲政記念館で長いこと資料の収集にあたっておられた伊藤光一さんに、きょうはお話をうかがおうということでございます。じつはつい先日、ご一緒させていただきまして、松本剛吉のお孫さんに会いました。松本剛吉日誌の原本を2人で覗いて、「昭和4年の分があるわ」ということですね。それにちょっと遺本と言いますか、草稿と言いますか、そういうものもあったので2人で喜びました。なお、「これですべてか」と言いましたら、「いや、ちょっと手紙などがございます」と。「誰の手紙がありますか」と言ったら、「西園寺さんの手紙などがあります」と。「ゴチャゴチャでするので」ということですので、ゴチャゴチャのまま次回出して見せていただきたいとお願いしたような次第です。くっついて歩くといいこともあるなという感じでございます。きょうは、長年のお仕事のなかで見聞したいろいろな資料などの話をざっとしていただいて、皆さんから質問していただくという恰好で進めたいと思います。伊藤さん、よろしく願いいたします。

伊藤(光) 伊藤でございます。先生方を相手に、そんな大それたことが言えるような者ではございませんが、展示会の資料集めにつきまして、体験したことなど喋らせていただこうと思っています。その前に、ちょっと憲政記念館について触れますが。これは前説で、これがないと喋りにくいものなのでお聞きください。

憲政記念館ができましたのは昭和47年でございます。これは議会開設80年を記念して衆議院事務局がつくった施設で、国民の皆さんに、政治というものはいかなるものか理解していただくことを目的に設けられました。しかし、当初の考え方は、政治資料などを集めることは論外で、じつは国会には議長、副議長、その他大量の肖像画があります。その肖像画が、倉庫に入りきれなくなっています。そうしますと、貴族院の永年表彰、衆議院の永年表彰といった絵が置く場所がなくなってきましたので、どこか置く場所をつくらうということから出発したものです。ところがいったんつくってみますと、それだけでは物足りないということになりまして、

開館の披露をするにあたっては、資料展をやらなければつくった趣旨に沿わないということになり、改めてそういう資料収集を行い、展示会をやる館・・いわゆる博物館的なものをつくろうと考えたわけです。

そこで最初に、昭和 47 年 3 月、開館特別記念展をやりました。そのとき、約 80 点ぐらいの資料を集め、参観人数を、5 万人と想定したわけです。なんでそのような想定をしたかと申しますと、いちおう三権の長を全部集めましてセレモニーをやり、皇太子ご夫妻もお招きする。それが新聞に出るとわんさと集まるだろうと。そういう都合のいいことを考えたものですから、参観者 5 万人、パンフレットも 5 万部つくりました。さて、4 週間たってみましたところ、参観者が 7600 人。これにはガクッと来ました。何でこんなに観客が少ないのか。また、来館した専門家は皆黙って帰ってしまったと言う。それで、よくよく後でうかがいましたところ、「あなたのところに展示したものはごく一般的な印刷物と、詔勅ばかりではないか。あれでは行っても、面白くない」と。考えてみますと、82 点中じつに 18 点が詔勅および詔勅関係物で、あと会議録が約 30 点ぐらい。そうしますと残りのごくわずかで、書簡とか私文書の類はわずか 11 点しかありません。それもよく知られたものだけで、これではなるほど、皆さんお出かけにならないと納得しました。

これではならぬと、いろいろ先生方にお教えいただき、館企画の方向転換をしなければいけないと考えたのですが、いまさらそれに見合うスタッフを雇うわけにはいかない。そこで、開設当初から憲政記念館に配属された者たちで、改めて資料を考えてみようということになり、大久保利謙先生、国学院の藤井貞文先生、それから清宮四郎先生、佐藤功先生と、第一級の先生方をお招きしてお教えをいただいたのですが、教わるほうが能力がなく、なかなか成績を上げられないで、ズルズルと 5 年間、同じような展示会を開き、7000～8000 人台ぐらいの参観者を集めておりました。そうしましたところ、事務局の会計課から文句が出まして、「湯水のように金を遣って 7000 人や 8000 人で喜んでいるな、お前たちは神経がどうかしてるんじゃないか」と言われました。これは、少し考えなければということで、発想の転換を図り、まず通史展をやり、それから人気の高い人物展をやって、人を集めようじゃないかと考えました。

発想を変えた最初が、昭和 52 年、開館の 5 年後にやりました、「伊藤、大隈、板垣展」で、ここで初めて 13000 人ぐらい参観者がおいでになったので、これはしめたと喜びました。その次が、われわれの基本となっております憲政史展で、この展示会で幕末から今日まで通しで開展し、われわれの勉強の基本にしようというものです。そのころは、大久保先生はじめ諸先生方が、「こういうものを入れよ、ああいうものもいい」といろいろアドバイスをしてくださいますと、非常に質のいいものができました。私は当時、企画を担当しましたので、案を持っていきますと、

次から次へと削られて新しいものに振り替えられます。そういうことで、相当に高度な展示とわれわれは思っているんですが、水準的な展示会をやることができました。

以後、年々、資料調査で、全国に出かけるようになりました。その槍の先端にいたのが私ども企画と調査という係りで、北海道から鹿児島までぐるぐる歩きまして、資料の持主と膝詰めでお話しして、資料を集めました。以来延々と、続けておりますものですから、ある程度資料の所在については承知しています。もっとも、何分にもわれわれの仕事というものは展示会向けに資料を集めるものですから、文書だけでなく、又文書にしても専門家の皆様と違って深く突っ込んでいくことがありません。浅く広くいろいろなものを見てくる。ただし、その過程でその年度の展示では使えないものですが、何か引っ掛かってくるものがあり、未知の文書などが出てくるわけです。それを頭に留めておいて、次の機会に使わせて頂く。こういう仕事をやっておりました。

幸いなことに、この第一回憲政史展の計画段階に渡辺行男さんという方が転勤になってきました。この方はすでに歴史小説『櫛生うる里』というのを出版されて、歴史分野の造詣が深い方ですから、私は渡辺さんとコンビを組んであちらこちら出かけました。ときには中国の資料(孫文関係)まで当たるようなこともありました。もちろん、それが理解できたかどうかということは別で、ただ多くの資料に接したということだけは確かです。

そういう過程のなかで多くの個人コレクションにぶつかっております。一例を挙げますと名古屋に湯浅四郎氏というコレクターがおられます。この方はおよそ何でも集めるという方でした。ここで古い選挙関係の資料をだいぶ頂きました。また東京では喜多川周之という方がおられまして、郷土史家ですが、東京の資料、特に社会的なものを集めておられました。大コレクターで、よくテレビにも出ておられました。喜多川さんは持っている資料の山のなかで暮らしておられまして、うかがいましたら、ご本人だけがおられ、六畳くらいの部屋の隅に布団が敷いてあってそこで寝ている。その周り全部が資料の山でした。資料が段ボールと戸棚に積み重なっているだけなので、「これでは私のほうで借りたい資料が分かるのだろうか」と思って聞きましたところ、「あ、あれはそこです」と。段ボール3つ4つをサッと開けますと出てくるのです。とにかく記憶力のいい非常なコレクターでした。この資料は、展示に向いている資料としていいものが揃っていました。現在は江戸東京博物館に入っています。あまりにも量が多いものですから、一度江戸博に「喜多川さんの資料は」と尋ねたところ、未整理だという話を承りました。

江戸博で未整理というのは、もちろん外部に対する言い方で、おそらくは分類、荒仕分けはしていると思います。でも、資料の数があまりにも膨大なので仕分けは

難しかったと思います。こういう資料は、だいたい未整理ということが多く、博物館等ではどこかにしまって、「いつかやろう、いつかやろう」ということでそのまま止まってしまうということが多々あります。

その他にも大きな資料群として目をつけたのは、仙台に大久保コレクションというのがございまして、これは仙台市立博物館に寄託になりました。その方の資料は維新から明治、大正ぐらいまでの有名人の書跡です。書を軸装とか額装にしたものです。書軸がほとんどでしたが、立派なものをお持ちでした。仙台市博物館に入っているようですが、寄託なので表面には出てきません。個人のほうから先に申し上げましたが、次に博物館資料について触れたいと思います。

博物館の資料を集める方法としては、購入、それから寄贈。この2つがだいたい公式に登録されるもので、寄託と、それから特殊なものですが預託というのがある。これはやっているところとやっていないところとあります。預託の場合は史料の存在がまったく外には出てきません。ですから、あるということがわかっているけども、博物館に行ってもありませんと断られます。そういう性質の史料もあるわけです。仙台市博物館も民権家の文書資料を集められていますが、仙博の目録を見ても出ておりません。博物館については、後でまた申し上げますけれども、収集資料群としては相当にあっても、いろいろの事情で外に出ないものがあるということだけ、申し上げておきます。

また個人コレクターのことですが、個人コレクターにつきましては先ほど申し上げました大久保さん、あるいは喜多川さんの資料の他にも、羽島コレクションという有名なコレクションがあります。これは、新聞のコレクションです。新聞で大きな事件のあるものについてはよく集めておられますので、生新聞を使うというときにはいいのではないかと思います。皆川重男新聞号外コレクション（荒川区寄託）というのもあります。

他には、書簡を集めている方が非常に多い。書簡を集めているというのは、資料の調査収集をしている方にとってはありがたいんですけども、残念なことに系統だって集めていない。専門家の方でしたら、おそらく「こういったテーマで資料を集める」ということになるのですけれども、こちらは要するに「大久保のものだ」「板垣のものだ」という好みで集めているから、贋か何かわからないけれども書いてあれば買い集める。玉石混交ですけれども、非常に面白い資料がたまに出てきます。そういうものを発掘したコレクターと付き合っておりますと、情報のネットができる。ただし、コレクターにはコレクターとしてのいろいろなお考えがありまして、この付き合い方というのがなかなか難しい。これは後ほど雑談的に触れたいと思います。

私共がこういった方々を紹介してもらうにどうしたかと言いますと、古本屋に非

常に近代史料に強い人がいて、この人がなかなかの情報通で思いがけない資料を私共のところへ持ち込んでくる。大きなものでは、青木周蔵の文書。持ってきまして、「こういうのがある」と言うので見たら、間違いなく本物です。「どうしたの?」と言ったら、「いや、某所から出てきた」と。「某所というのはどこだ」と言っても、それはなかなか言わない。青木家に関係のある方ということは確かです。そういうものが出て来たり、時によりますと宮家から出てきたものもありました。雑多なものの中で政治向きなものをいちおう私のところへ持って来まして、「これ、どうだ」「これ、どうだ」というんで見せてもらいますが、「いい」と思っても買うには高すぎて買えない。コピーを取らせて貰うのが関の山です。有名な資料としましては、黒田清隆の文書が遺族の申し入れで国会図書館から引き上げられまして、鹿児島島の黎明館に移りましたけれども、この移ったときも、反町弘文荘に入ったものですか、高額で取引されています。

そういったコレクションについては、持主が亡くなると、然るべきところへということがあるのです。資料を拝借した名家とは長くお付き合いをするようにしました。ただし、付き合い方としてコレクターには面倒な人が多く、まず第一に資料の悪口を言わないこと。入手先をくどくど聞かない。これは最初の段階ですね。それから……向こうの話が止まるまではこちらからは話さない。これはなぜかと言いますと、向こうでは得々と入手経路や何かを自分でしゃべってくれるのに、それを聞かないで、途中で口を挟むと「うるさい」となるわけです。それから、自分の用件を性急に言わないということなんです。「いい資料をお持ちなので、あれを拝借したい」と言うのが目的ですが相手の話が終わるまで黙って待っているわけです。すぐに「なになにを貸してくれ」など言いますと、旋毛が曲がりまして、「じゃあ、きょうは忙しいのでこのへんにしよう」と追いつ返されるのがオチです。また、ご挨拶を忘れるということは怒られる因なんです。まず初対面の挨拶、帰りの挨拶、年賀状、それで何か催したときにはご案内。こういったことを欠かしますと、コレクターは信頼をもって付き合ってくれません。信頼されますと、先ほどの伊藤先生のお話ではございませんけれども、その家に入出入り自由ということになりまして、思いがけない資料を見られることがございます。こうしたタブーを守りながら、コレクターと付合って参りました。

いい関係になりますと、処分できない雑資料を寄贈してくれることもあります。新聞資料と、いくつかの文書資料は、そういう方から手に入れました。中に大正6年の選挙のときの選挙事務所の一切の資料というのがありました。そのころはまだ個別訪問があり、ポスターとか立看板の選挙が許されない時代の資料なものですから、これはありがたかった。これは一式、全部揃ってます（上村耕作文書）。選挙事務所の事務員が、「これは動きが悪いから使わないように」などと書いたメモな

どがあり、面白い資料だと思います。もともと選挙と議会は収集の主なものですから、有り難くご寄贈いただきました。

さきほどの古本屋さんにも「そういう資料があったら」ということで頼んでおきますが、憲政記念館では滅多に買えません。見せてもらうだけです。向こうのメリットは、「これは確かなものか」といわば鑑定を頼むだけです。

個人のコレクターのなかには有名な先生方もおられます。大失敗をしたのが唐沢富太郎先生で、教育資料としていろいろなものをお持ちでした。私どもでは唐沢先生をお持ちの資料を拝借しようと思ひ電話をして、「こういう館なんですけれども、貸していただけますか」と申し上げたところ、一喝されましてね。「きみ何だ。人の大切に集めたものを電話でもって貸せとはどういうことだ。礼儀を知れ！」と行って電話を切られました。もうだめですね。また、末松さん（謙澄遺族）のところに行ったときも、大事なことなのですが、相手の家系図とか家族構成をよく知らないで行ったものですから、末松家に行って、あるものを拝借しようとして、実権を持っていらっしゃるのがおばあさまなど伺ったものですから、おばあさまに拝借をお願いしたところ、「ああ、いいですよ」というので、喜んだ私どものほうでは予定しておりましたところ、後日、ご当主から電話がかかってきて、「俺に何の断りもなく貸せとは何事だ」とご破算。いまもって末松家には行かれませんが、こういうように、個人の方との折衝はもっとも難しいもののひとつです。時には出入り禁止になります。それから、面倒な資料探しを頼むものですから、向こうの方も探す暇がありません。それをせつつくものですから、向こうも嫌がるし、会いたがらなくなります。そういうことが多々ございました。

ですから個人の方と接触するときは、その代でだめならその次の代まで追いかけないといけないこともあります。具体的には若槻さん（礼次郎遺族）のところでもそういうことがありまして、若槻さんの資料はあったはずなんです。若槻家の資料を拝借した時、ご当主に「もう少しある」と言われました。「それはだめでしょうか」と聞きましたところ、「母の枕元にある箱のなかにあって、それは母が鍵をしめてあって、開けることができない」と言われました。以後、若槻家に何かあったときにはもう一度ご当主にお会いしたいものだとは思いうちに、こちらのほうが先に憲政記念館を離れるようなことになってしまいました。個人とかコレクターの場合には苦勞がたえません。扱い方も非常に注意されます。物の扱いが悪いと「帰れ」と言われますし、「帰れ」と言われてもずうずうしく何回か繰り返し謝りに行くぐらいの根性を持っていないと、この手の方と付き合うことはできません。

次に、博物館とか文書館とか図書館につきましては、先生方のほうがよくご存じなのでとくに申し上げますが、博物館、美術館というところも、じつは文書資料とかかけっこうあるものです。ところが外へ出てこないのは、先ほど申し上げまし

たように寄託あるいは預託というものがあり、それと数が少ないので従来ある目録のなかに埋め込んでしまうので、それがわからない。ですから、丹念に見てないといけません。憲政記念館では各博物館の館報といったものから全部、新収資料を抜いておきます。「こういうものがあそこに入った」と記録しませんとこの種館園の文書資料は分かりません。

それと、博物館は概して政治向きの展示会をあまりやりません。なぜかと言いますと、館内で反対が多かったり、賛否両論が拮抗するものは避けます。例外として、自治体・県・市議会の100年展、県の100年展といったような記念展。それから原爆、空襲、戦時中の生活を扱ったもの。これは頻繁に行われております。集まる資料が膨大な数になりますので、珍しいものが出てくることがあります。また、博物館のなかには近代史を専門にする博物館もありますので、その博物館にはそのような資料が集められていると考えていいのではないかと思います。

それはなぜかと言いますと、そういう展示会をやりますと、観客が展示会に資料をお持ちになってきます。「こういうものがあるけど、おたくで預かってくれないか」とか、「保管してくれないか」と。あるいは「買ってくれないか」と言われます。たとえば和歌山県で陸奥宗光の展示会をやりましたとき、そういったことがあったと館の学芸員が言うておりました。ただし、その結果について外に出てくること（経過報告書等）は、ほとんどありません。私の館でも、ひとつ展示会をやるごとにいろいろな売り込みがあり、情報が寄せられました。なかには貴重なものも含まれることがあります。でも、これは館員が積極的に集める努力をしないと集まりません。

一度アンケートのなかに、「おたくに政治資料等がありましたらお書きになって、教えてください」ということをやりました。情報が集まり、40件ぐらいありました。その時は、一つひとつ電話をして、あるいはお宅へうかがって確かめて、そのうちの7、8件は館の資料としていただき、お礼を差し上げてご寄贈という形でやりました。しかしそれが一度で終わってしまったのは、その次やったところ、館員が面倒臭がって電話もしなければ何もしないので、向こうが怒って「失礼だ」といわれ、館員も、やりたがらなかったのをやめました。しかしこれは今もって惜しかったなと思っています。博物館や記念館の職員が資料の重さを認識していなければ、こういうことは、やっても無意味に終わります。

同じように、外から依頼状が来ます。「貴館の資料は何がありますか」という依頼状に対しても、博物館とか記念館は、つきなみな返事しかいたしません。細かい調査をするには、相手の館に強い人に会わない限りは、なかなか内容を把握できません。私は出かけます者に、まず向こうの館のいちばん中心になっているような方に必ずお会いするようアドバイスします。一例をあげますと、仙台市博物館には佐

藤憲一さんという近代史に強い方がおられました。私の若い頃ですが、その方に会いました。早くより自由民権の研究を進めていた方なので、ずっと接触しておりました。先ほど申しあげました大久保資料（大久保良雄コレクション）とか、あるいは民権資料（大竹文書）のリストをいただきました。「これは外へ出していないので、公表しないでくれ」と言われました。佐藤氏は後に普及室長となりました。こうした実際に史料を扱っている方と接触しますと、博物館に入った珍しい資料の情報がつかめると思います。鹿児島島の黎明館なども、現在でもどンドンと資料を集めておりますけれども、なかなかリストが出てこないのが残念に思っています。博物館というのは、外には出てきませんが、どの館もある程度の近代史資料を持っておるのが普通であろうと考えています。

近代史に強い博物館といいますと、八王子に郷土資料館というのがありまして、戦争資料をよく集めています。その他にもいろいろ強い館がありますけれども、列挙しても時間がないので、いずれ、こういう館がありますということをご紹介申し上げたいと思います。その他、こういった文書資料を持っているところとしては個人記念館があります。原敬とか、あるいは田中角栄、大平正芳、結城豊太郎、それから徳富蘇峰、斉藤実、後藤新平、前島密、鈴木貫太郎など個人記念館は多数ありますが、個人記念館というのは遺品がどうしても主になるものですから、文書が多いところといえば後藤新平とか、あるいは原敬記念館。それから、このごろ出来たところでは先人記念館というのが盛岡に出来まして、米内光政の資料がだいぶあります。田中角栄とか大平正芳とかの記念館等は現代風の展示館ですから、遺品中心でちょっと資料的には乏しいと思います。ただし大平記念館のほうは、大平さんの書簡等が入っています。ただ、それはまだ公にはしていないようです。岸信介さんの資料についても、山口の田布施の郷土資料館のほうへ入っています。これはいきなり行きましてもだめで、紹介者が必要だと言われています。そういう館は、紹介者がないと断られることがあります。

話は飛びますが、資料がばらばらに分かれてしまうことがあります。資料の分散しているのは徳富さんが二ノ宮と熊本、それからもう一カ所ございます。宇垣一成さんは憲政記念館と早稲田大学、それから国会図書館というふうに分かれています。このようにいくつかに分かれている資料もありますので、こうしたものは記録してまとめておいたほうがいいのではないかと思います。

原敬も、原敬記念館は文書は少なく、原さんのご遺族の原利和さんのところに大慈会という原の顕彰会がありまして、そちらのほうにあるものが3分の1、それから京都大学が3分の1ちょっと、原敬記念館がいちばん少なくて日記と多少のものです。珍しい資料で原さんのところにあつたのでついで見えてまいりましたのは、京都の実相院というところの文書がありまして、実相院文書といっておりますが、

元禄前から大正ごろまで、詳細な日誌があります。この日誌で考えているのは、岩倉具視の住んでいたところに近いものですので、岩倉幽棲の記述がたぶんあるのではないかと、いずれもう一度見てみようと思っています。これは歴年、全部揃っていて、大変な量です。なかに、絵が描いてあったり、それから瓦版などの写しがあったりして、非常に面白く見て参りました。

最後になりますけれども、国会の資料について申し上げておきます。国会では帝国議会当時の資料というのは、本書と言われる原本が保管されております。もちろん火事に2度遭っておりますので、その火災でなくなった資料もありますが、雑多なものが第一議会から大体、揃っています。会議録は当然ありますけれども、その他の原本類ですね。たとえば議員提出法律案の原本、それから雑多な辞職願いとかが、あるいは雑事の記録といったものが大量に残っておりまして、各部課でも……。各部課と申しますのは、衆議院には委員部とか議事部とか、あるいは警務部といったような各部に分かれておりますが、そういった部課にも帝国議会当時の資料が見つかっています。しかし、そのうちの何割かは焼却処分されています。私どもが調査したときはすでに遅くて、こんなものはいらないと指定の業者に持って行かせ、断裁して燃やしてしまいました。ですから、資料のいくつかはもうありません。しかし、重要な記録も残っていますので、いま憲政記念館へ、各部課の帝国議会当時の文書を引き渡してもらえないかという話を先般、伊藤先生と記念館長に話しております。それがもし憲政に來れば、これからの研究の資料となることは間違いないと思います。

占領当時における当時の国会側の資料も多少ありまして、たとえば国会からGHQに持って行きまして、GHQの「ここがだめ、ここがだめ」というような指定があつてところに赤線を引っ張った経過録があります。こういうものは、当時のものの考え方がよくわかるのではないかと思います。国会になってからのものですから、なかなか出ないと思います。

貴族院の資料もあるんですが、貴族院資料というのは衆議院の帝国議会当時の資料よりもさらに少ないものですので、あまり知られていません。資料を集めている部署も…。参議院に別館というのがあります。そこに資料を集めている課があるんです。そこに虎門会記録というのがありますが、これは大久保利謙先生とか、当時の貴族院議員が会を開いたときの、筆記記録なんです。これは非常に面白い記録ですが、これはないことになっているので外へ出ていないそうです。あれをいつか引き出してやろうかなとは思っているのですが難しそうです。職員にはある程度見せますので、駿河台大学の広瀬さんがまだ憲政資料室にいらっしゃった頃一緒に参りましたが、「こんなものがあるか」とちょっと驚いていました。ただ貴族院のことですから、彼はあまり興味を引かなかったようですが、ご専門に調べている方で

したらたぶん面白いのではないかと思います。

衆議院の場合は、ただいま申し上げましたような資料につきましては、全部資料課というところが衆議院院内の4階の倉庫に全部しまっていてあります。見ようと思えばなんとか見られると思います。

伊藤(隆) 私、見に行ったことがあるんです。

伊藤(光) 雑駁なお話で申し訳ありませんが、資料集めというものを25年やっております、あちらこちらで叱られた経験ばかりしかありませんがこのように過ごしてきたということ。

伊藤(隆) 私も憲政記念館とのお付き合いは非常に長いものですから、憲政記念館がいま持っている重光(葵)、それから宇垣(一成)……

伊藤(光) あと、あるのは風間泰男(東京裁判弁護団事務局長)文書、緑風会文書。

伊藤(隆) いま言った2つは私が関わっているんです。私と渡辺さんがやりまして、やっぱり展覧会に出してくれと。予めあそこの家に文書があるということがわかっているときに、展覧会に出してくださいということを頼むと、なかなか断り切れなものですから向こうは出してくれると。そうすると、人がいろいろ言ってくれるものだから、「じゃあ、やっぱりこれは大事なものらしいな」ということで、「ここは信頼できそうだから寄託をしよう、あるいは寄贈しよう」ということになるんですね。そういうことで、憲政記念館ならびに憲政資料室をずいぶん利用して資料収集をやったんですけれどもね。

おそらく憲政記念館の持っている資料はかなりあるけれども、でも伊藤さんがいま言っていない資料がたくさんあるんですよ、じつは。それは憲政記念館も同じことでして、じつはつい最近……昨日あたりの話なんですけど、いま樺山資紀の文書を樺山さんの遺族から買しまして、尚友クラブで整理をしてるんですよ。せっかくこれだけすごいものがいっぱいあるのだから、樺山資紀関係文書というものをつくろうということにしまして、憲政資料室にある樺山文書のマイクロフィルムをつくったんです。そうしたら、「じつはこの目録に載っていないんですが、書簡がたくさんあります」という話が出てきましたね。

それはなぜかという、こういう長い巻物なんですよ。3段かなんかに貼り込みになっているわけです。そうすると、あそこの憲政資料室で閲覧させるというと、こんな長い巻物でもありますし幅がうんとありますから、まずかろうというので、いままで公開していなかったんです。中を見ると、非常に面白い資料が、手紙がたくさん入っているんです。それは寄託になっているものですから、これはしめたというので、じゃあ樺山さんに言って何とかしよう。こういうことをチラリと言いましたら、次の日に遑・クラブに電話がかかってきて、「あれは今度、公開します」と(笑)。で、「マイクロフィルムを撮っても結構でございます」と言ってきたも

のですから、撮れることになったんです。今度、僕は紹介しようと思っているんですが、そのなかにまた福沢輸吉の書簡が1通入っているんですね。樺山は文部大臣だったものですから、たぶんそういう関係だろうと僕は思っていますけれども。そういうことがあるんですね。

憲政記念館の20年のときですか、憲政記念館が持っている文書のリストを出したんですけれども、さっきの話じゃないですけれども、あれはまったく表向きの資料の話で、あそこの地下に入りますと、目録以外のものも結構あるんですよ(笑)。本人は人のことをいろいろ言って、自分のところは言わないんですね(笑)。職務に関わる秘密なのかどうかわかりませんが、あるんですよ。あるんでしょ？

伊藤(光) いや、表に出ていない資料というの、まだだいぶあのなかに(笑)。「憲政記念の二十年」をつくったときに、文書資料を出そうということになって初めてつくったわけなんですよ。この他にに入れるものは、まだ未確定のものも多かったのです。全部まだ段ボールに入ったままになっている。そういつたことがありますので、そのうち……(笑)。矢部貞治(東大名誉教授・拓大学長)先生の文書は、うちのほうへ寄託になった分とそれから預託になった分とあって、その預託分は全部こちら(政策大)のほうへお持ちしようと思っています。

伊藤(隆) もうあと何日もないよ、3月。

伊藤(光) なんとかあります。箱に入れて持ってくればいだけですから。第1部として持ってまいりますから。その他にも、風間という東京裁判の弁護人事務局の事務長をしていた方の文書も大量にあるんです。ですけれども、それもまだ未整理だし。

伊藤(隆) それから、衆議院の事務総長かなんかをやられた方のものはありませんか。

伊藤(光) ああ、鈴木(隆夫)さんの資料ですね(笑)。いや、それもありましたね。

伊藤(隆) 鈴木隆夫さんのものもあるんでしょ？

伊藤(光) 日本国憲法の、改正小委員会のメモですね。あれは図書館にあげなかったもので、その後、当方に置いてあります。

伊藤(隆) あと、衆議院事務局関係の人の資料も少しあるんじゃないですか。

伊藤(光) あります。ちょっと資料については、未整理段ボールの山のなかへ住んでいるものですから、なかなか……

伊藤(隆) 口にチャックしないでさ(笑)。

伊藤(光) よそへ行っても同じことを言ってますよ(笑)。「あるはずだけど」って言うのです。

有馬 いや、いただいていますよ。

季武 僕も、じつは憲政記念館が主とされている憲政とか選挙に非常に興味があるものでして、前からお話を聞きたいと思っていながら、ずっとさぼっていたんですけども。閲覧というのは、どういうふうなんですかね。

伊藤(光) 閲覧の制度というのがないんですよ。

伊藤(隆) ないんだけど、武田君がずっと見てたようにね。

伊藤(光) 形はないのですけれども、あるようになりますから(笑)。まだまだ未開発地帯で、たとえば公文書館とか宮内庁のほうですと非常に難しいルールが決まっておられますけれども、うちのほうは見せるルールがない。ないということは何でもできるということで、それは無限大に何でもできます。従って倉庫を見ることも可能になります。

伊藤(隆) でも、直に行ったんじゃないだめだ、全然。

伊藤(光) それはもう、衆議院の資料課なり参議院へお話になってスムーズに見られるかというのと、とんでもないと思いますね。これはどこも同じではないかと思っているんですよ。しかもああいう、公開している場所ではないので。

伊藤(隆) 何があるかというのがわからないだけのことですね。それをだから、館の人に聞かなければわからない。で、その館のなかの人も、こういうベテランの人がだんだんいなくなっちゃうと何があるのかわからないということになりますね。重光の文書を武田君が一所懸命見たわけですけども、目録のある部分は重光文書のなかのごく一部でありましてね。彼が見たのは、重光文書の目録にない分をだいぶ見たんですね。それはだって、重光さんの家から僕らは膨大な量の箱を運んできたわけですから、あんな小さな目録ではごく一部に決まっていますよ。

伊藤(光) 宇垣さんのも、そうだったですね。

伊藤(隆) 宇垣さんの、まだあるんでしょう？

伊藤(光) まだありますよ。

伊藤(隆) ですから、それは交渉して、いずれこっちで目録をつくってやろうかなと思っておりますけどね。

季武 じゃあ、これからは年賀状も欠かさず出すようにして、末永くよろしく願います(笑)。

伊藤(光) ただ、うちはいま職員が、中の資料がわからないことが多い。何があるかということを知りません。目録を見て、スッとわかる人は誰もいないのではないかと思う。これは代々の資料係が、わけのわからないものは全部その他という項目に突っ込んだことが大きいですね。分類がしっかりしていないから、あれはどこにいったんだと探し、目録の簿冊を引っ繰り返しているんです。「あれを探してくれ」というと。だからもう、これでは全然役に立たないから、全部やり直せと言っているのですが、特別展、特別展で追われて、やり直している暇がないということで進み

ません。一度はやらにゃいけないのですけれども、時間がかかりそうですね。

伊藤(隆) 結局いまのところ、簿冊しかないわけでしょ？

伊藤(光) そうなんです。

伊藤(隆) だから本当は、電子化すれば検索が簡単ですからね。乱雑にであろうと何であろうと、とにかく入っていれば検索は可能なんですけれどもね。

伊藤(光) だいたい、「憲政記念館の二十年」記載の目録で整理されたように見えていますけれども、いろいろな分類を種類別に直しているものですから、なかには番号がとんでもないところに入っているやつがあるんです。ですから引き出すときは、上の番号で引いて、担当は下の番号で引くんです。そうしませんと出てこない。

季武 たとえば、僕が大正6年の上村資料を見に行きたいというと、どうすればよろしいんでしょうかね。

伊藤(光) どうぞ、お電話をいただいて。ご覧になるだけでしたら、別にさしつかえなく見られます。

伊藤(隆) 資料館……憲政記念館も一種の資料館なんですけれども、結局整理をきれないので、やっぱり憲政資料室と同じでどんどん人が変わるわけです。それで、ノウハウが蓄積されない、いままでの仕事が継続されないということがあって、そのうちだんだんわからなくなってしまうというのが実情だろうと思うんですね。ですからわれわれのこの研究会が、僕はもう少し年限を延長して科研費をとって少しそういうところにも手を出して、だんだんこっちで整理すると。だから出してちょうだい、というのをやろうかとも考えてはいるんですけれども。将来的にはそれは絶対やるつもりなんです。

さっきちょっとお話しました、樺山資紀の仮目録をつくって遺族に渡しましたら、さっそく感謝状が来まして、「もうちょっと暖かくなりましたら、蔵のなかから樺山愛輔の文書を持ち出してお届けいたします」ということなんですよね。児玉文書もだいたい、いま目録が出来上がりかかっていると。その児玉（秀雄）文書と樺山（資紀・愛輔）文書はどうしようかといっているんですが、とにかく憲政資料室に持っていってもしようがないと。その前に出版しちまえと。それまで渡さないでおこうということに、いましていてですね。それは、われわれが将来つくるであろう資料センターに結局流し込もうというのが、私の狙いでありましてね。だいたいすべてそういうふうな恰好で、いまやっているんですね。

さっき冒頭に僕が言いました松本剛吉のものも、どこかでとにかく、憲政記念館で預託でも何でもやっておいてもらって、あれは貴族院議員ですから尚友クラブでも構わないんですけれども、そういうところで獲得してやっていこうと思っています。それとの関わりもあるんですけれども、この前道・クラブで講演をいたしましたら、大村益次郎の文書……それは公開されているのかどうか分かりませんが、元

は山口にあるんですね。そのコピーをくれまして、「こういうものがございます」と。私、2月に1ペン尚友クラブで講演をすることにいたしまして、講演の度にいろいろな情報が入ってくるということで、少し集めようと思っているところです。

いろいろ話を聞いていますと、あそこは子爵さんと伯爵さんの子孫ですけれども、ちょっと名前を言いますと「ああ、あれは誰々の親戚だ」という話でありまして、侯爵さんであろうと男爵さんであろうと、みんないわば親戚で、それ以外にも財界、官界の大物などの姻戚関係が非常に大きいんですね。それをたどってやっというところ。こういうことを考えています。ただ、そういうことをやっていると、「じつはどこかの博物館に預かっておる」という話も出てくるんですね。おそらく伊藤さんは博物館をいろいろ見て、「あ、ここにこんなものがあるな」と、きっとだいぶ知っていると思うんですよ。言わない(笑)。自分のところも隠してるから、他のも言わないと(笑)。こういう恰好だろうと思いますが、さっきのは本当にわれわれが知っているような触りのところだけしか話してくれなかったんですね。そうでしょ？

伊藤(光) いや、そんなことはないですよ。先生方の情報網に比べれば、私なんかは本当にトンボ釣りの網ですよ。

伊藤(隆) いえいえ、何をおっしゃってます。

季武 先ほど、館報を全部チェックされてるということでしたけれども。

伊藤(光) それと、各地の展示会のなかで政治関係の目録はだいたい集めておるものですから、これは非常に有用だと思いますよ。

伊藤(隆) 展示目録というのは非常に役に立つんですよ。憲政記念館の展示目録をずっと、何々文書というやつを、誰々氏所蔵というのを全部リストアップしますと、われわれがあまり知らなかったようなやつが出てくるんですよ。

季武 僕はつくりましたよ。いつもいただいているのを紐閉じにしたら、このぐらいの厚さになっちゃうんですね。

伊藤(光) そうですね、26回やってますから。ちょっと手に入りにくいものも、たぶんあったと思いますよ。

季武 大変ご苦労な。

伊藤(光) 最初から関わっているものですから、それぞれに思い入れがありましてね。「おまえは雑駁なことをやってるから、こういうものをつくるのは好きだろうから、やれ」ということで始まったんですけれども、そのまま26年が過ぎましたですね。

伊藤(隆) あそこでは渡辺さん・・・さっき名前が出ましたですね。それから金子久男さんが、やはり資料情報というのはかなりたくさん持っていてね。僕も前に、季武君やモロ君と一緒に、軽井沢へ行ったでしょう。ああいう恰好で持ってるそこ

ろがけっこうあるんですね。

伊藤(光) ありますね。図書館でも、ずいぶんあるんですけどもね。

伊藤(隆) どこに何がありますかね(笑)。

伊藤(光) 国会図書館で前に出した、特殊資料コレクション要覧というのがありましたね。あれが古くなったから、あれの改訂版ではないけれども、個人別とそれから事件別につくろうかなと考えているんですよ。

季武 ぜひお願いします。

伊藤(光) 地方の小さな館ですとどうしても、あるということと言わないんですよ。行って話しますと、何だかペラペラの薄いもので、仮目録みたいなものをくれまして。そういうのがけっこう溜まってくるんです。中には、もったいないと思うものも多いですね。

伊藤(隆) それはだから、さっきの話ではないけれども、「なるべく人に見せないでください」というのもあるでしょ？

伊藤(光) あるんです。

伊藤(隆) それをだから、見せてくださいと(笑)。外に出しませんから。

伊藤(光) インターネットでやると、「情報源はおまえだな」なんてことに(笑)。

伊藤(隆) 閉じられた系のなかに入っていますから。

伊藤(光) いや、もうほんと、それは固く言われているから、信義の問題ですからね。出入り差止めになっちゃうから(笑)。

伊藤(隆) 大丈夫だから(笑)。さっきちょっと黎明館の名前が出ましたけれども、表に出てないものがあるように思います？

伊藤(光) そうですね、いくつかありましたね。長谷川(宏)さんがよく……ご存知ないですか。

伊藤(隆) その人、長谷川さんという人なんですか。

伊藤(光) 主査の長谷川さんという、資料に強い人なんですよ。

伊藤(隆) 僕も今度ちょっと鹿児島に行くので、その人を紹介してください。

伊藤(光) はい。まだいると思いますけど(現在は退職)。なにせ公共博物館の悪いところは、どんどん偉くなるにしたがっていなくなっちゃうのがね。

伊藤(隆) 横浜の開港資料館なんかは、あなたはあまり行ってませんか。

伊藤(光) よく行ってます。

伊藤(隆) だから、それをちょっと話してくださいよ。あそこはどんなものを持ってるんですか。

伊藤(光) この間の展示会でちょっと驚いたのは、伊藤痴遊の文書があって、すごく面白いのがありました。

伊藤(隆) へえー。

伊藤(光) 伊藤仁太郎(衆議院議員・講談師)ですね。展示会をやったぐらいですから。資料的にはかなりあったはずですよ。その後、あそこに入れたと思うんですよ。あそこに神様みたいな女性がひとりいましてね。その方が早稲田の出身で……

季武 吉良(芳恵)さんですか。

伊藤(光) 皆さんご存知ですか(笑)。その他にも山口(美代子・女性誌研究家)さんが行ってますしね。ですから、充実していますね。

伊藤(隆) 前から「来い、来い」と言われていて。

伊藤(光) 一緒に行きますか。

伊藤(隆) 行きましょう。広瀬と一緒にいこうって言うてるのに、なかなか「はい、はい」とか言って、きょうも来てないしさ(笑)。

伊藤(光) 「あいつの言うことはまた同じだ」といって、来ないんじゃないですか(笑)。

伊藤(隆) 広瀬君もね、この前もここに来て……彼はこのメンバーなんだよ。彼がしゃべって、当たり障りのないことを言ったんだよ。それでちょっと怒ってるんだけど(笑)。「憲政資料室では、公開していない資料がいっぱいあるでしょうが」と言ったら、「いや、全部処理してきました」なんて言うてるから。あれはまったくの嘘なんだ。(笑)。

伊藤(光) 山積みになってるのがあるじゃないですか。

伊藤(隆) しょうがないなあ。そのうち全部そういうのをつつき出して、出しますからね。インターネットでホームページをつくりまして、いまどこにどういう資料があるというのをつくっているんですよ。だけど、目録を入れるということもしたいんですが、これ著作権問題とどう関わるのかよくわからないので、いま内部情報に。要するにメンバー以外には入れない、そういう場所をつくりましてやってるんです。だから、あなたも入って貢献してください。「じつは」というのを(笑)。「なんだ、こんなものしか入ってない。俺が知ってるのはこういうのがあるよ」と、教えてくれればいいんですよ。

伊藤(光) いや、たぶんみんな先生のご承知のものばかりだったなんてことに(笑)。

伊藤(隆) また、そういうこと言って(笑)。

伊藤(光) 吉田(茂)さんの資料は、健一さんの奥さん(信子)が亡くなったけど、どうなったんですか。

伊藤(隆) どうなったんですかね。心配してますけどね。

伊藤(光) あれは、私どもではいちばん狙っているところなんですよ。ですから、じつは吉田健一さんの奥さんにぶつかったことがありますけど、そうしたら、「いいですよ」と言われ、「ただし、某所に全部しまってるから」ということなので一

且引き下がったのですけど。

伊藤(隆) あの人は、イタリアかなんかにしょっちゅう行っていて、あまり日本にいないんだよ。

伊藤(光) でももう、この間亡くなられたから、その後は……

伊藤(隆) 誰がどういうふう引き継いだのか、よくわからないですけど。

伊藤(光) 吉田家は、ちょっと。

伊藤(隆) 健一未亡人でしょ？

伊藤(光) あの方がいちばん煩くて、ご機嫌を損じたらば、もう絶対だめでしたね。

伊藤(隆) ただ、吉田さんのところは白州さんと親しいわけだから。白州さんは樺山家の出だから、これでちょっとアプローチしようかと、いま考えてるわけですね。

伊藤(光) そうですか。あそこはまだ宝庫なはずなんですけどね。

伊藤(隆) 宝庫ですよ。いっぱいあるって聞いていますよ。いま、佐藤栄作をやっているから、その関係で今度は岸さんを何とか攻略しようっていうんですよ。やっぱり、自分で集めることを本格的に考えないと、情報も集まらない。持ってる人、持ってる機関などにやたらアプローチすると、向こうは自分の縄張りを侵されるという感じになるから、逆をやって、こっちが持ってなければだめだということですね。

伊藤(光) そうですね。われわれにはいいけど、早稲田は外部にはかなり厳しいそうですから。

伊藤(隆) 早稲田もずいぶん持ってるんでしょうね。

伊藤(光) あります。この間、佐藤(能丸)さんのところに行ったら、未整理のものが山になってました。

伊藤(隆) 佐藤君て誰？能丸さん？へえ。じゃあ、ちょっと能丸さんも一度来て話してもらなきやいけないですね(笑)。

伊藤(光) あの人も情報通ですよ。能丸さんだったら、話しは面白いですよ。

伊藤(隆) それはじゃあ広報にちょっと、記憶に留めておいて。あなた親しい？

伊藤(光) ええ。

伊藤(隆) よし。今度、4月は桜井君をやることにしたんですけどね。あとどうですかね、情報通としては。

伊藤(光) あとは、吉田財団と国学院の柴田紳一さん。参議院のことでしたら前田英昭さんが。この間、ご紹介しましたよね。参議院でいつも講義してますから、あの方はもともと参議院の職員だし。

伊藤(隆) あとは、自民党は村川一郎っていう人がいるでしょう。

伊藤(光) はい。いま、どこか大学に出たんじゃないですか。

伊藤(隆) あの人もこの間からだいぶ、『日本政党史辞典』とか、あれを自由新報

の会のやつに書評してくれっていうから、これは接触のチャンスだなと思って。

伊藤(光) 内藤(丈二)という記者が来たんじゃないですか。

伊藤(隆) いや、誰だったか忘れちゃったけど、そんなような名前だった。

伊藤(光) あそこのベテラン記者で、あの人も情報通ですからね。

伊藤(隆) あと、一度水田(三喜男・元蔵相)文書というのにアプローチをしかかったんですけどね。

伊藤(光) 水田三喜男さんですか。

伊藤(隆) だけどこれが、人事と絡んじゃったもんですからね。要するに僕が東大を辞めるときに、「国際なんとか大学というのをつくるから来ないか」という話で、どうも危ない話だなと思って、半分のったような半分のらないような恰好をしていたら、結局亜細亜大学に行くことになっちゃったものだから、向こうに不義理したわけで、どうもちょっとね。

伊藤(光) 私らはやっぱり訃報を見て、ハイエナじゃないですけどすぐ行くんですよ。それがいちばん効果的でしたがね。でも、いまは誰も行きませんね。石田博英さんなんか、ぜひ行こうと思っているのですが。

伊藤(隆) 石田博英(元労相)さんね。一時期は、総理にもなるんじゃないかという勢いだったんだけど。

伊藤(光) そうですね。ちょっと現役を離れていると、あまり行く暇がなくなってしまって(笑)。これはしょうがないものですね。

伊藤(隆) やっぱり戦後史は、これから誰かが目を付けてきちんと追っていかないと、出てこないと思うんですね。憲政資料室で僕はそのことを非常に強く言ったんですけども、やるつもりがあまりない。能力もない。館としても、あそこに特別にそれだけ力を入れるつもりはないということで、大喧嘩をやらかして辞めたわけですけども。結局、僕らがつくる情報センターみたいなものでそれをきちんと系統的に、いろいろな伝ができましたのでそれを追いかけてやっていきたいと思っています。いろんな面白いことがありまして、伊藤さんは何も言いませんでしたけれども、彼から僕は田川誠一(元自治相・新自由クラブ代表)の日記を見せてもらいまして(笑)、「僕はこれを出版するから、田川さんの了解を取れ」と、いま伊藤さんに言っているんですけどもね。

伊藤(光) やっぱり相手があることですから。ただ、あの種のもの全部いちおう私の手元に来たらば、コピーされると思って間違いないでしょう(笑)。後でなくなっちゃうのがあるんで、犬養毅(元首相)さんの手紙なんかも、いい手紙があったのですが、それが所蔵者の手元にもうないんです。3度目に行ったときかな、これはないと言われました。

有馬 大藪房次郎宛ての書簡ですか。展覧会に出たやつがありましたね。

伊藤(光) 犬養さんののは、真鍋儀十に出した手紙です。だいぶ前のものでしたけれども。そういったものもなくなるし、今回もちょっと惜しかったのは、うちの諸君が乗り気じゃないのでだめでしたが、書簡で浜口(雄幸)さんが普選について書いたものがある。それを持ってるのがいると田川先生が紹介してくれましたが、「行け行け」と言っても誰も行かない。ついに流れてしまったのですが、非常にいい内容なので、残念でした。

伊藤(隆) 今年は、少し鳩山日記を出版のほうにもっていくことになっていますが、僕は前から鳩山を狙っていまして、片岡テツヤというフーバーエスチューションの人ですが、この人が鳩山由紀夫さんと友達だというので早速やりましてですね。それとだいたい並行して憲政記念館が、これは金子さんですけども鳩山家にアプローチをしております、それを合体したような恰好で鳩山家の文書は憲政記念館が整理したいと。ですから鳩山の目録があるんですよ。

伊藤(光) ええ、目録はあります。

伊藤(隆) 僕もちゃんともらっていますけれども、僕のところに来たのもだいたいコピーされることになりますから(笑)。あれは記念館ができましたので、あそこは持っているというわけで。しかしこれ、僕は想像したよりはるかに少ないですね。

伊藤(光) そうですね、あまりありませんでしたね。

伊藤(隆) これはどういうことかなと思っておりますが、やっぱり空襲で音羽の一部がやられて、じつはそこに資料があったという話で、ないんですよ。

伊藤(光) 戦後のものはもっとあっていいですね。

伊藤(隆) そうなんですけれどもね。ちょっとそれがおかしいんですよ。だけ僕が聞いてみましたら、こういうことがあるんですよ。僕はいちばん最初、鳩山の原文を書いたときに石橋義夫さんという共立の理事長に……。

伊藤(光) 秘書をやりましたよね。

伊藤(隆) そうそう、あの人にアプローチをしたんです。そうしたら彼が、「じゃあ自分の持っているものだけ見せてやろう」というので、見せてもらったんです。そのなかの一部、日記があったんです。それで、今度鳩山家から日記のコピーを全部もらったわけです。それで作業をしたわけです。そうしたら、そこの部分がないわけですよ。それで、石橋さんから借りたやつをそこに挿入したと。こういうことで作業を進めているわけですね。そのときに石橋さんに聞きましたら、「鳩山さんが死んだ後、鳩山さんの書斎にみんな出入りしていた。だからあれ、持って行かれてもわからないですよ」という話なんです。なんか彼の話によると、「鳩山一郎だけではなくて鳩山和夫の資料もあったはずだ」というんですよ。だけどこれもどうも、いまのところないみたいな感じなんです。それで僕は鳩山日記を出すときに、あそこの奥さん・安子さんと話をしておりますら、「鳩山が薫さんに出したラ

ブレターの山があります」という話をしておりました。なんかそれ、本に出ましたかね。全部かどうかわかりませんが。そのときに一部読ませてもらったんですけれども、例の大正期特有の非常に甘ったるい文章でして、これはなかなか面白かったんですけどね。鳩山の人柄を知るためにはですね。ただ、本になりましたか？

武田 なりましたね。展示もされてるんじゃないですかね。

西川 展示はしてないですけども、ヨーロッパから送った分や何かは本になったと思います。

伊藤(隆) そうですね。いや、そういうのではなくて、もっと若いころですよ。結婚する前。

伊藤(光) 出てないのではないですかね。

伊藤(隆) それもだから、日記が出たらそれは出してもよろしいという話になっていましたので、まだたぶん出てないだろうなと思ってんですけど。

武田 特別展とかでも出てないですか。

西川 いや、それは見に行っていないですけど、最近出ましたよね、鳩山由紀夫さんが脚光を浴びたときに。

伊藤(隆) どこから出たのかは、ちょっと僕も手にいれたいんですけども。なんか出てたような気がしますね。チラッと広告を見て、あとどこかわからなかったの。

伊藤(光) あそこの事務局長とは仲がいいですから。

伊藤(隆) どの？

伊藤(光) 鳩山会館。

伊藤(隆) じゃあ聞いてちょうだい。

伊藤(光) 大竹(範)さんと言います。

伊藤(隆) じゃあ、情報だけ聞いて？ どこから出たのか。鳩山の薫さん宛ての手紙。

伊藤(光) 本ですか？

伊藤(隆) 本になって出てたと思う。

伊藤(光) それ、本は向こうにあったですか。

西川 僕はそこは行ってないんですけど、本の出版の広告は見たことがあります。

伊藤(光) そうですね。鳩山さんの、戦後よくみんなと使ってた和室があるでしょう。あれがオープンになってないんですよ。

伊藤(隆) あ、そうですね。

伊藤(光) あそこは使われていないんです。そこを写真に撮りに行くからということで、言っているんです。聞いてみましょう。

伊藤(隆) 聞いてください。僕は、何べんかあの和室に行きました。ちょうど鳩山が石井とかああいう連中を集めて、いよいよ政府解除が近いからどうしようかとい

う話をそこでやっていて、それでこのトイレに行って倒れたという、その説明まで聞いて帰ってきました。

伊藤(光) 写真を、全部一通り撮っておこうと思うんですよ。いつなくなるかわからないから、ああいう和室なんていうのは。

伊藤(隆) あれ、本館というか、建物があるでしょう。で、なかに芝生があって、その先にバラ園があって、その奥に和室の建物があるんですよ。「どうぞ自由にご覧ください」というから行って、もしかしてこのなかに資料がないかななんて思って開けてみたけど(笑)、何もなかったな。ほんと、人が見てないと思ったら何やるかわからないから(笑)。

西川 うちの、そろそろ本がなくなっちゃうんですけど、入江日記を去年、展示されてましたよね。あれはいま、どなたがお持ちなんですか。

伊藤(光) 入江さんのほうから借りましたですよ、お宅のほうから。

西川 ご当主が亡くなられましたよね。あの奥さんですか。

伊藤(光) はい。

伊藤(隆) あれはやっぱり、多少手を入れたのかな。

西川 どうでしょうかね。一卷の部分は自分で手を入れてやりましたね。あと出版は飛び飛びですので、ただうちは例によって接触しないもので、どうなっているのか。

伊藤(隆) 接触しないんですか？

西川 しないんですね。しなきゃいけないと思うんですけどね。

伊藤(隆) いや、じつは僕、三井文庫の評議委員なもので、昨日三井文庫の理事評議委員会というのがありまして、霞が関ビルで会ったので。ただ、三井文庫は最近の、近代のものをこれから出版するというので、三井物産の営業報告書や何かをまとめて出版する計画のようですね。そこから始めるということでした。そのときに、理事に中田易直さんがいるわけですよ。それで中田さんが、「いったいこの書陵部は、昭和天皇紀をつくることができるんだろうか。いったいどんな体制でやってるんだ。誰がいるんだ。今度の人事はけしからん。あんなのでできるわけがないだろう」ということで、非常に憤慨されておりましたですね。僕もちよっと共通の感覚をもっていて、非常に憤慨してですね。

伊藤(光) やっぱり、異動が大きくあったんですか。

伊藤(隆) まあ、異動があったわけですよ。「誰が中心になってるんだ」というから、「いや、誰が中心という、中心がないじゃないか」と。僕らは「たぶん、あれはできないぞ」と言っているんですけど。

伊藤(光) だいぶ進まれていますか、それにしても。

西川 私がいちばん口が軽くていいんですね、もう。たぶんできると思いますよ。

と言いますのは、事務日誌みたいなものがあると思っていただければいいので、その横にあるものを縦にすればできると。それから先どうなるかは、私は難しいと思っていますが。

伊藤(隆) だから、明治天皇紀のようなものは、僕はちょっと無理だろうと思うんですよ。だけど、みんなが明治天皇紀というのを見ているから、おそらく昭和天皇実録もそういうものだと認識はしてると思うんです。ただ、あのとき明治天皇紀を編纂するのに大々的な組織をつかって、大量の学者を集めてやったわけですからね。「それに比べていまのわれわれはいったい何だ」と、こういうことなんですよね。僕は昭和天皇記実録をつくるという話が出たときに、その前に集めないこれは危ないと思ひまして、急きよ戦後史に自分の対象を移したんですけれども。

伊藤(光) 原文書を集めてるわけではないのですね。

伊藤(隆) 集めてないです。ただ、実際に編纂を担当している人が、昔の内記部ですか、ああいう関係のデータに直接接触できているのかどうかということになると、ちょっと甚だ疑わしいなと思っていますね。だいたい組織の歴史を書くときに、その組織のいちばん骨になる資料をきちんと提供されなくて、出来るわけがないんですよ。東大 100 年史のときは、じつはすったもんだすったもんだ散々やって、それで評議会の議事録から何から全部出させたわけですけどね。それだって、出さないのがずいぶんあったんです。

季武 教授会記録がそうですね。

伊藤(隆) 教授会記録は各部局ですからね。

伊藤(光) 私の方でこの間、最初の昭和改元の号外とか、大量に入手しました。あれはけっこう面白かった。現物ですから、もしもご入用でしたらどうぞ。順を追っていますから、寄贈してもらって、いまは私の手元にありますけれども。館に正式に入る前でしたら楽ですから（笑）。入っちゃうと、当分出てこないですよ。

伊藤(隆) 宮内庁からの申入れなんていったら、それは出しますよ。

伊藤(光) いや、それが目録にも何にも出てないから。噂ではね。

伊藤(隆) あなたのところで表に出してないのがたくさんあるっていうけど、それは書陵部でもそうなんですよ。

伊藤(光) 書陵部はありますね。

伊藤(隆) 本当に、国家のために許せない、犯罪行為だとしか僕は思えないんですけど。平気にやってるんですよ、あれ。

伊藤(光) だいたい許せないものを出してもらいましたから、森(縣)さんに頼んで。

西川 この間の展示会では、出ないものが展示してありましたね。

伊藤(光) 借用については、前よりもいまのほうが厳しいですね。

西川 森さんのキャラクターが、かなりあったと思います。

伊藤(光) そうですね。

西川 秘書類纂の原本が、この間出ていましして、あれはないはずになっているものなんですよね。

伊藤(光) いや、本当にそういうのがいくつかあるんですよ。それで森さんに言うと、「これはなあ」って言うけど、結局のところ出してくれましたから。でも、侍従職が持っているものは手厳しいですね。

西川 ちょっと無理ですね。書陵部からの口では無理ですね。

伊藤(隆) 秘書類纂はどっちが持っているんですか。

伊藤(光) 書陵部です。

梶田 あのへんは、現場では「見せたほうがいいんじゃないの」って言うてるんですけれどもね。

伊藤(隆) そのうちちょっと、騒ぎを起こしてやろうかなと思ってるんですよ。そのときは身軽になった西川君にもご協力を願って（笑）、極秘情報を流していただいて……すぐわかっちゃう（笑）。いや、だって情報源は別段彼だけに限ったものではなくてさ。

伊藤(光) 風の噂に（笑）。

伊藤(隆) いやいや、いっぱいあるんですよ。

伊藤(光) 書陵部の、宮内庁図書館のお手元文書なんかかっていうのが、ありましたか？

西川 リブロスかに載ったやつでしたっけ。

伊藤(光) いや、あの目録は外に出してないでしょ、まだ。

西川 あれは、戦後すぐに間違いで出たやつですね。

伊藤(隆) それは持ってる？

伊藤(光) あると思います。

伊藤(隆) 貸してください（笑）。

西川 ガリ版刷りのやつですよ。

梶田 なんとか1号っていうやつですか。

伊藤(光) なんとか1号と書いてあったですかね。

西川 目録の1号で、ガリ版のやつですよ。

梶田 ボロボロのやつですよ。

伊藤(光) あるということも外には知らせてないみたいですよ。

伊藤(隆) そうですね。それ、コピーさせて。

伊藤(光) いやあ……（笑）。

西川 以前に千葉君がアプローチしてたもとのあれです。

伊藤(隆) お願いします。大丈夫ですよ、心配しないでください。

伊藤(光) ペロッといま言っちゃったけど(笑)。

梶田 私も、何か落ちてるのを原本をもらったことがあるけど(笑)。ボロボロだからしようがないから、ビニールの袋に密閉して入れてありますけれどもね。

伊藤(隆) あなた、個人で持ってるんでしょ？

伊藤(光) たぶんそんなところでしょう(笑)。

伊藤(隆) そうでしょ。個人は自由だからいいでしょう。

伊藤(光) いろいろとあちらこちらから目録をもらってるものですから。

伊藤(隆) あなたの目録、ちょっと見せてよ。

伊藤(光) 何だかへんなのばかりありますよ。それと、私どもで持ってる目録は文書ばかりではありませんから、雑多なものです。

伊藤(隆) きょうは伊藤さんは話をしませんでしたけれども、彼はだいたい物のほうの収集が専門ですからね。誰が何を持っているというのは、彼の財産ですから。

伊藤(光) 派生してこういう文書が出てきます。

伊藤(隆) わかります、わかります。だから、派生した部分はいま言っていたんですけど、それも全部ではないので(笑)。本当にいろんなコレクターがいるでしょう。

伊藤(光) いますねえ、これは。私のコレクター名簿を見ても、「もう大変だ、こんなものを」というのを、「あ、この人に聞けばわかるかな」とかやるわけですよ。そうすると、だいたい出てきますね。

伊藤(隆) だから、憲政記念館の展覧会に行かれると、「エーッ」と思うようなものが、へんな看板が出ていたりね。ああいうのはみんな伊藤さんがどこかからか集めてくるんですよ。それはやっぱり、だいたいコレクターから借りてくるんですね。

伊藤(光) 意外な看板コレクターというのがいましてね。山脇の理事長もそうなんですよ。あの方が、学校に行きましたら、「部屋に僕の集めたやつがあるから見に行かないか」と。山脇玄(貴族院議員)さんの息子ですよ。行ったら、なんと幕末から大正期に至るまでの看板がズラーッと並んでるんですよ。まあ、驚いたですね。どうしてああいう学校のなかにこんな自分の部屋をつくってるんだって。それを見せてくれて、「いいでしょう」というわけです。「いやあ、すごいですね。これはいいなあ、これはいいなあ」と言って歩きましたがね。そうしたら喜んで、「あなたが今度来たら、いつでも貸しますよ」と(笑)。

伊藤(隆) 要するに、褒めまくる以外ないわけね。

伊藤(光) 入手経路を聞いたんで……。国会図書館で展示会をやったとき、西南戦争絵巻というのを栗津国哉というコレクターが持っていたのですが、それを借りようとして電話をしたというわけなんです。そのときに、「あなた、それどこで手に入れました？」とやったもんだから怒っちゃってね。私のほうでその後に行ったの

も運が悪かったんですけど、「じつは国会……」と言った途端に、もう「国会」と聞いただけで、「あなた、もういい。電話しないでいいよ」といってガチャンと切られちゃいましてね。癩に障るからもう一度電話をして、「じつは憲政……」と言ったら、「あんたのとは違うみたいだけど、でも私は二度とおたくと付き合うつもりはないし、貸すつもりもないから、いいでしょう」と言われました。それで、何でだか聞きたかったんですよ。「それはどういうことでしょうか」と言ったら、「某という人が聞いてきて、無礼な台詞だったのでだめだ」と。そういうことを言われました。

また、稲生典太郎先生という中央大学の先生がおられますけど、あの方には議会報告書のコレクションがあって、そのコレクションを持って寄贈しようと思っていたのですが、「憲政資料室にこういうものは」と言われ、それで私のところへ寄贈されました。政党史とかをやる方でしたら非常に便利なものになると思います。それでコツコツとその後集めているので、けっこう大コレクションになっていますけどね。そういうことがあるので、口のききかたは大変なんですよ。

伊藤(隆) ちょっと待てよ、口は大変なほうはいいけど、報告書のほうはその後も集めてるわけ？

伊藤(光) 集めてます。

伊藤(隆) それは憲政記念館のコレクションなのね。

伊藤(光) コレクションです。議会報告書コレクションは大量にありますから。

伊藤(隆) そういう話はさっき出なかったな（笑）。

伊藤(光) これは、ごくつまらない話ですから（笑）。ほんと、つまらないというか、そういうものがけっこう集まるんですよ。

伊藤(隆) ゆっくり聞きますから（笑）。終わらないよ、きょうは。ドカーンという話をしてくれたら、お帰しする（笑）。

伊藤(光) こういうものは、口が軽くなるのは何かやらないとだめなんですよ。

伊藤(隆) だけど、先に先に伸ばしたのではまずいからさ。

伊藤(光) 具合の悪いのは、「先生、酔いました。もうだめです」って帰っちゃうから（笑）。ああ、ちょっと変わったものを預かっていましてね。伊藤梅子さんが息子（文吉）に出した手紙というのが 100 通ぐらいあるんです。

伊藤(隆) そういうことを聞いたら、またあなた無礼者って言うかもしれないけど、どこから手に入れたんですか（笑）。

伊藤(光) いや、これはね……言うともまずいかな（笑）。伊藤博文家は娘ばかりで、息子というのが伊藤真一さんと言って、お妾さんの子どもですから伊藤本家からは疎まれていたようですが、娘さんのところとは交流があったようです。私は真一さんから、藤井清子さん（次女の孫）や伊藤俊夫さん（養子文吉の孫）を紹介し

て貰いました。伊藤文吉さんという方に、梅子夫人が手紙を出していますが、これが懇切丁寧に何から何まで注意書きをし、いろいろと言っています。ああいう手紙がまとまって残っているのも、ちょっと他にないのではないかと思います。

伊藤(隆) 文吉さんはだって、実業家だよな。

伊藤(光) 文吉さんの幼少時代にです。いま、憲法記念碑が夏島というところにあります。あの近く、夏島の反対側に東屋という旅館があった集落があります。この集落の先の野島というところに伊藤文吉家の別荘があったんです。博文の夏島の別荘というのは取り壊してなくなっていますけどね。野島の文吉別荘があって、彼が日産の重役だったものですから、戦後そこを日産に引き渡して、そこが伊藤博文家別荘だったという伝承が出来てしまいました。結局東屋というところは、最初に憲法の草案を4人で起草したところで、泥棒が入ったので引き払いますけど、起草の最初が東屋だったものですから、その前に憲法草創の碑というのが作られました。それが、区画整理で文吉の別荘前に移動したんです。それで、伊藤博文の夏島別荘というのはここだというふうに。

伊藤(隆) ああ、文吉さんのところをね。

伊藤(光) それでそのままずっと今に至るものですから、土地の人はもちろん、いろいろと間違えられています。夏島の記念碑というのは、横須賀の夏島町にあって、横浜の金沢区ではありません。その夏島の記念碑も二度動いています。元の位置は今工場になっていて見られません。文吉家別荘の前の憲法草創の碑もこのごろ東屋の近くに移されました誰もがこの記念碑を憲法記念碑と思いきや間違えます。このごろこれは違うのではないかと言うことで、作り直しました。記念碑が動くにはいろいろとあるものです。

伊藤文吉さんのご遺族は伊藤俊夫さんと言われますが、奥さんの姉さんが桂さんの奥様でした。それで、桂さんのところにも顔を出すことができました。奥さんは品川弥二郎の選挙干渉のときに内務次官をやった白根専一ですが、その家の方なんです。その白根家出の奥様方に、「東京女学館へ行きなさい」というので東京女学館に行って、そこでもってだいぶ知り合いができました。やはり丁寧にお願いして、何人かに資料を拝借することができました。

伊藤(隆) 東京女学館はあなたが持つてるわけじゃなくて……？

伊藤(光) 東京女学館に資料室があるんですよ。そこの資料のなかには、原さんの姪御さんとか、兄さんの娘さんですね。そういった方もおられるものですから、台帳というか、学籍簿を見せてもらいました。さらに校長先生が四竈さんというんですね。四竈さんはどういう方かという、侍従武官の……

伊藤(隆) ああ、あの四竈さんね。

伊藤(光) そういう日記があるということ。

伊藤(隆) 四竈日記はだって、出版されたじゃない。

伊藤(光) 出版されました。そのときはあまりよくわからないから、大したものじゃないだろうということで、見送ってしまったんですけどね。そういう経過で、女学館のなかでいろいろな方の資料を持っておられる方の情報をもらいました。これは今もひとつの財産になっていますね。

伊藤(隆) その財産をそのうち、継承して（笑）。

伊藤(光) そのとき、伊藤家に山のように梅子夫人の書簡が……

伊藤(隆) それがあったわけね。

伊藤(光) それをちょっと拝借をして、いまに至るまで拝借しているんです。あれは、間もなく返さなければいかんけど。一度、コピーをとらなきゃいけないと思っ
てますけど。

伊藤(隆) ちょっと話が変わるけど、木佐木日記の話もしてくれたほうがいいんじゃないの。

伊藤(光) あ、木佐木日記。これがまた傑作で。公開をされた木佐木日記というのがありますけど、あれはおそらくだいぶ修正されているというか原本をもとに、後から書いたものではないかという気がします。展示会に出したいと思って元になる木佐木日記を探してもらいましたが、なかったのが娘さんにもう一度探していただいた。そうしましたら、出てきた日記がありまして、これはなるほど木佐木日記の原本だなと思いました。とにかく、最初に出された木佐木日記の原稿ですと出したものは、全部原稿用紙に書いてありました。これではちょっとおかしいのではないかと思うのと、字も違うのではと感じたのでお願いして探してもらったら、そうとうにボロボロになっていましたが、ありました。それを見ますと、木佐木日記に書かれていることと違うんです。なぜ違うかという、あの方は中央公論ですよ。滝田樗陰というのが当時編集長で、その方を公刊のものには褒めちぎっているんですね、「偉い人だ、偉い人だ」と。

伊藤(隆) 出版されたのがそうね。

伊藤(光) ええ、出版されたやつは。でも、日記のほうを見ましたら、「滝田の野郎が」と。あれはなるほど、出ませんよ（笑）。「こういうことを言ったのにもかかわらずなんだ。不愉快だ」とか書いてあるんですよ。そばに、編集者が2人いるんですね。伊藤ともう1人、何とか言いましたけどね。これは木佐木日記の刊本のほうから名前を引き出しましたのでわかりましたけど、その人たちも「あれは優秀だ」とか何とかいろいろ書いているが、「あれはどうにもならない放蕩なんだ」とか、「あれはもう使い物にならん」とか書いています。あれを見ますと、いかにジャーナリストというものは表と裏を使い分けて入れるものかと思いました。これはちょっと酷いなと思って、喜んでコピーさせてもらいました（笑）。あの世界の方々

は大変なものですね。

展示に使う予定でいたのですが、木佐木さんの名誉のため、やめようということで、お断りしました。後日談がありまして、木佐木さんの娘さんが「どうしてダメなのか」と、言われました。娘さんは木佐木さんをよくご存知の方・・・たとえば阿川弘之さんに電話をして、「うちのものが出ますから、ぜひ見に行ってくれ」と言ったので、出ないと「私の立つ瀬がない」とお怒りでした。担当者が困って私のところに「どうにかしてくれ」と言うから、関東大震災のことを書いた原稿があるんですが、それを出すことにすればと、アドバイスしました。この方も木佐木さんが口で言って、それを娘さんが書いたのではないかと思うのですが、あまりにも整い過ぎているのでやめていたのですが、せっかく言われるのだからとこちらを出展しました。

伊藤(隆) 弱気だなあ。樗陰のやつぐらい出せばいいのにさ(笑)。

伊藤(光) 憲政史展ですからね(笑)。

伊藤(隆) だけど、中央公論が憲政を論じて、何とかに及ぶっていうあれなんだからさ。

伊藤(光) そう思ったんですけど、もう今更しようがないということで。

伊藤(隆) それ、原本を出版しようよ。

伊藤(光) 一度、見てください。

伊藤(隆) つつくといろいろ出てくるでしょう。なるべくつついてください。まだドカーンというのが何かあるはずだと、僕は思っているんで。

西川 ひとつよろしいですか。さっきお話してました白根ですけど、あの関係はありませんか。あの子どもはたしか宮内省の参事官とかやっているんで。焼けたという噂も……。

伊藤(光) 白根さんそのものの資料はないと言っていました。白根家の出ですからすぐ聞きましたら、ないという話でした。何回か震災にあって、火事にあったりして、ないと。そういう話でした。戦前の資料をお持ちの、たとえば中田敬直さんとか、そういう方のご遺族にはなるべく当たるようにしています。栗原彦三郎とか、中田敬直さんとか、中村藤兵衛さんとかね。あまり知られていませんが、戦前の議会展などの目録を見ると、いろいろとお持ちの方がいるわけですね。そういう方の遺族を探して、いろいろ聞くことも情報収集の一つですからやっているのですけれども、なかなかうまくいくものではないですね。

伊藤(隆) やっぱそれは、10 やって1つ当たったらいいほうですからね。

伊藤(光) 憲政の皆さんは、行けばもうあるものだと思いますよね。だから、無駄な努力はしないということで行かないけど、かつては情報のネットを広げるためと喜んで出ていったものです。行って誠意を尽くせばその時はないんです

けど後で気がついたとか、いろいろ言われましてね。あるいは、しばらくたってから電話が来るくともあります。これは必ずうかがうようにしています。電話だけで済ませないで。

伊藤(隆) やっぱり、直接面と向かってやらなきゃだめです、それは。

有馬 さっきの、同じ日記でも何種類もあるという話ですけれども、これは憲政資料室にあるものだからあれですけれども、大木操（衆院書記官長）の日記がありますですね。あれ、ご本人が書いたやつが何種類かありますよね。あれは後でノートに清書したやつですね。

伊藤(光) ええ、そうですね。

有馬 それの元になったと思われるものが、部分的に憲政の大木文書のなかにもありますね。ただ、こっちはつながっていないんですけれども。そのなかのある時期について、非常に詳しいやつがたまたま残っていたりしますね。ああいう衆議院の事務総長のあの日記というのは、性格上……。

伊藤(光) いや、公的なものではありません。

有馬 ではないわけですね。

伊藤(光) ですから、その後に出ました鈴木隆夫さんの文書がありますね。あの方も、メモを最初に取りますが、そのメモは項目だけサッサッサと書いてあります。時間等は丹念に書いてあります。それを今度はもう一度、写し直しています。原敬のものも同様に、3種類の日記のようなものがあります。メモのようなものを元にもう一回書いて、それを最後に筆で清書していると。僕らは考えています。たぶんそうだと思うのは、元は非常に簡単に書いてある。それからその次のものは意外と、こんなことまで書いていいのかなというようなものまで書いてある。最後のものは、何年かたったら出してもいいだろうと。そういうもので、その前の2つがきちんと残っていれば、面白い発見ができると思うのですが、残念なことに前の2つは断片的にしかありません。鈴木さんののも同じです。確かにそういう断片的に書いたものは少ないんですけれども、存在します。

有馬 だいたい衆議院の事務総長なんていう人は、そういう習慣を持っていたものですか。

伊藤(光) 持たない人もいましてね。大池（真）さんというのは、戦後すぐに事務総長となり議事運営の神様のように言われた人ですけれども、お側におりましたが、あの人が日記を書いたのを見たことないですね。メモをチャッチャッと書くだけで、それでおわり、書く暇もなかったかもしれませんけど。あの方は書きませんでした。ただしその後の鈴木さんとか、その後は……知野（虎雄）さんもあまり書かないかな。でも知野さんは非常に筆の立つ人ですから、書いているかもしれません。

有馬 鈴木隆夫さんのそういう日記というかメモは、憲政の鈴木文書のなかにはな

いんですか。

伊藤(光) いや、鈴木文書のなかにはないですね。

有馬 それはどこにあるんですか。

伊藤(光) 鈴木家にあれば、あると思います。事務総長当時の鈴木さんの秘書をやっていたのが、憲政におりまして、資料管理課長をしていた今野さんというのが、文書を最初全部、私のほうの憲政へ持ち込んできたんですけれどもね。それを憲政資料室とうちのほうに分けたのですけれども。うちでもらったものは、展示に向くようなものということなので、憲法改正委員会に出席されたときのメモのようなものを取りました。これは目録にも出ていません。整理中です。他にもいろいろと古い方がいて、資料を置きっ放しにしていってしまうものですから、そういうものも整理すればけっこうあるはずです。なかなかうちも、全部が全部さらけ出しているわけではありませんから（笑）。

伊藤(隆) 御用と御関心の向きはぜひこちらへご連絡を、ということです（笑）。

梶田 企業が持っているような個人の文書というのは、けっこうあるんですか。

伊藤(光) 企業の？

梶田 企業のレベルで、会社のレベルで。

伊藤(光) あります。それはもう、このごろ企業博物館が多いんですけれども、そういうところに入らないで、けっこう重役や何かが自分が書いたものは、僕らはずいぶん見ますけど。

梶田 でもそれは会社レベルで、広報かなんかは把握してないんですか。

伊藤(光) 広報やなんかではなかなかわかりませんね。そのトップに当たって、直接聞きます。秘書に連絡をして。仕事と離れたことだと、意外と簡単に会ってくれるんですよ。仕事上で会うとなると、構えてしまって難しいんですけれどもね。「じつはこういうことで、お父様の話を」というふうに持ちかけますと、だいたい。そうしますと、それは意外とどんな大社長でも簡単に会ってくれます。

伊藤(隆) 三井にしても三菱にしても住友にしても、ああいう大財閥はいちおう資料館を持っているわけですね。それ以外はなかなか、オーナーの遺族に当たる以外に手はないんですね。

伊藤(光) 出しませんね、そういうところの資料館には。やっぱりちょっと具合が悪いことが……

伊藤(隆) それは具合の悪いことがいっぱいあるんですよ。ドカーンというのが出ないから、やめよう。そのうち出てくるかもしれまんせから。

伊藤(光) また、お付き合いください。

伊藤(隆) 田川さんの、早くやってよ。

伊藤(光) それもあるし、矢部さんのもあるし、だいぶあるんですよ。いまみんな、

ふうふう言ってやっていますよ。

伊藤(隆) お願いしますよ。

伊藤(光) 松本さんのものはコピーをとって。

伊藤(隆) あれ、かなり量があるから大変だとか言ってたけど。というふうなことでございまして、次回は桜井君でございますので。今度、あなたに案内をあげるから、この人の話は面白そうだなと思ったら、盗みにいらっしゃいよ。

伊藤(光) はい、わかりました。

伊藤(隆) どうも伊藤さん、ありがとうございました。(第5回終了)